

本多静六博士～日本の緑を育てた埼玉の偉人～

第2話 林学博士としての本多静六

今回は、林学博士としての本多静六博士の主な業績についてお話しします。

前回の動画でもお話ししましたとおり、明治23年（1890）から2年間、本多静六はドイツに留学して、当時の先進的な西洋の林学を学び、日本帰国後の明治32年（1899）静六は32歳で、日本で最初の林学博士号の取得者となりました。



大学での授業風景



大学演習林で指導する本多静六

その後、明治33年（1900）静六は33歳で東京帝国大学農学部の教授となり、その後、50冊あまりの林学に関する専門書を著し、日本で初めて造園学の講義を行うなど、日本の林学の先駆者として、その発展と普及、指導者の育成に大きく貢献しました。

実は、静六が林学を学んでいた明治時代前半は、日本国内では林学が軽視されている時代でした。そうした社会風潮の中で、静六は生涯

にわたって、「人は生まれて産湯につかるときから、棺桶に入る時まで、一生、木のお世話になっている。」と山林の効用を強く訴え続けました。

そして、静六の主張した山林の効用は、静六の手がける様々な研究や、事業などの成果を通じて、やがて世間にひろく知られるようになります。

そうした静六が手がけた事業の代表例として、青森県野辺地町の鉄道防雪林と東京都渋谷区の明治神宮の森をご紹介します。



野辺地鉄道防雪林

明治26年（1893）、静六が、ドイツ留学を終えて日本に帰国して初めて手がけた実業分野の事業が、青森県野辺地町の鉄道防雪林の整備事業でした。

鉄道防雪林とは、吹雪の中でも、鉄道が安全に運行できるよう、雪除けを目的として線路や駅舎沿いにつくられた林のことです。野辺地町の鉄道防雪林は、日本で初めての鉄道防雪林であることから「鉄道防雪原林」とも言われています。

この防雪林がつくられたきっかけとなったのが、明治24年（1891）の東京・青森間の東北本線の全線開通です。東京から青森までが鉄道1本でつながりましたが、青森県内では、冬になると地吹雪

のため、列車が立ち往生してしまう問題が起こりました。

この問題解決策として、静六は、ドイツ留学の帰り道のカナダで見学した鉄道防雪林の有効性を、当時日本鉄道株式会社の役員だった渋沢栄一に提言し、採用されたのです。

静六は、野辺地駅を中心とした線路沿いにスギの木などを植林し、鉄道防雪林をつくりました。

スギは、根が深く張り、雪折れに強いこと、成長が早くまっすぐに伸びることから、防雪林の木として選ばれました。

この鉄道防雪林は、鉄道の運行を雪から守るだけでなく、防雪林の木々から得られる経済的な収入も想定してつくられたものでした。

防雪林を構成する木々は、伐採することで木材として利用することができます。そして、木材を売却することで金銭的な収入を得ることができます。静六は、この木材で得られた収入を、防雪林の植林費用に充て、経済的な点でも、永続的に防雪林や鉄道経営を維持できるよう計画したのでした。こうした経済的な視点は、ドイツで学んだ林学を応用したもので、その成果が日本帰国後に早速発揮されたものでした。



野辺地鉄道防雪林に建つ記念碑

静六は、野辺地での鉄道防雪林整備とほぼ同時期に、青森県内の東北本線沿いの他の場所にも鉄道防雪林を整備しています。

静六の手がけた野辺地町をはじめとする青森県内での鉄道防雪林の整備は、その効果が大変大きかったことから、この後、日本各地に鉄道防雪林が整備されることとなります。



明治神宮の森

次に、静六の手がけた造園の代表例として、東京都渋谷区の明治神宮の森をご紹介します。

明治神宮は、大正9年（1920）にできた明治天皇と昭憲皇太后を祀った神社です。大正4年（1915）静六が48歳の時に、この明治神宮を造るために設置された明治神宮造営局の参与として参加し、中心的な役割を担うことになりました。

明治神宮の造営にあたっては、それにみあった立派な社叢をつくることが静六に求められました。

もともと、明治神宮の造営予定地は、畑などが広がり、森を造るのは難しい場所でしたが、静六は、この地の風土にあった木として、シイやカシ、クスノキなどの常緑広葉樹を森の中心となる木として選び、かつてドイツで林学を学んだ際の「天然更新」の手法を用いて、150年間をかけて明治神宮の森を完成させようと設計しました。

「天然更新」とは、人間の手をかけなくても、自然の力だけで木々が世代交代を繰り返し、永続的に維持される森のことです。

当初は植樹によってつくられた人工林が、150年間の間に段階を経て、最終的には自然の森と変わらない姿にまで成長していくことを静六は意図していたのです。



明治神宮造営のため寄付された植樹用の樹木

そして、この静六らが設計した森の実現のために、全国から約10万本の植樹用の木々が寄附によって集められ、広さ約70ヘクタールにわたる明治神宮の境内地に植樹されました。

埼玉県内の人々からも多くの木々が寄附されており、静六の故郷の河原井から寄附されたクスノキは今も健在です。

多くの人々の協力によってつくられた明治神宮の森は、その後静六が思い描いたよりもはるかに早く成長を続けました。明治神宮が造営されてから100年が経過した今、私たちが目にする明治神宮の森は、天然の森とほぼ同じ姿となっています。

静六が思い描いた「天然更新」の森が実現したのです。